

明暗評釈 二

第一回(下)

鳥井正晴

初出

大正五年(一九一六年)五月二十六日・「東京朝日新聞」。

大正五年(一九一六年)五月二十六日・「大阪朝日新聞」。

評釈

⑦【根本的の手術・根本的の治療】

(一)、①第百三十四回に、△私は根から先へ療治した方が遙かに有効だと思ふんです。(中略)夫人のいふ禍の根といふのは慥たしかにお延の事に違なかつた。では其根を何うして療治しようといふのか。肉體上の病氣でもない以上、離別か別居を除いて療治といふ言葉は容易たやすく使へるものでもないのにと津田は考へた。▽とある。

②第百四十二回に、△是程好い療治はないんですがね。▽とある。

(二)、「明暗」は、「則天去私」というイデー(理念)の具現化であるをいう、小宮豊隆・唐木順三に代表される見解がある。

①小宮豊隆の、△『明暗』▽『漱石の芸術』所収、岩波書店、昭和十七年(一九四二年)十二月)に、次の指摘がある。
△津田が果して小林のいふやうに、「事実其物に戒飭される」ものかどうかは、『明暗』が未完成のまままで終つてゐ

るのだから、確実には分からない。然し『明暗』全篇に与へられた傾斜から考へると、小林の予言は、同時に作者の予言であり、最後に津田が「事実其物」によつて「観面」に「切実」に「戒飭される」事は、殆んど疑ふべからざる事実であつたやうに思はれる。さうでもしなければ津田は、津田の業から救拔される期が、竟にないのではないかと思はれるのである。(P.322) >

②また、小宮豊隆の、△解説▽〔新書版『明暗』上・「漱石全集」第十四巻、岩波書店、昭和三十一年（一九五六年）十二月）に、次の指摘がある。

△漱石が死んでしまつたし、結末を想像させるやうなノートは何も残されてゐないのだから、我我には正確なことは分からない。ただ吉川夫人が津田に約束したやうに、夫人が津田の留守にお延を「奥さんらしい奥さんに」教育しようとして、仮にお延に、津田と清子との關係を打ち明け、津田が今行つてゐる湯河原の宿屋は清子の泊つてゐる宿屋であるなどといふやうなことを話して聞かせるとしたら、「生きてゝ人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好い」と考へ、自分の亭主の爲めに近いうち「何時か一度此お肚なかの中に有もつてる勇氣を、外そとへ出さなくつちやならぬ日

日が来るに違ない」といふ予感を抱いてゐるお延が、それに対してどういふ反応を示すかは、およそ想像のつくことではないかと思ふ。さうしてそれによつて小林が言つたやうに、津田が観面に切実に「事実其物に戒飭される」といふことになるのだとすれば、更にその想像は明確なものにしぼられて来る筈である。さうして津田の精神的な病氣が「結核性」でなかつたとすれば、天もしくは自然が、人間の手を借りて津田に加へた「根本的の手術」は、慥かに成效することになるに違ひないのである。(P.252) >

(三) 唐木順三の、△『明暗』論▽〔夏目漱石』所収、国際日本研究所、昭和四十一年（一九六六年）八月）に、次の指摘がある。

△だが最初の一行の最初の言葉としてでてくる「医者」には千鈞の重みがある。医者は作者自身である。津田といふ「明暗」の主人公は、作者の手術台の上へのせられてゐる。「手術台の上から津田を下した」であつて、「津田は手術台の上から降りた」のではない。(P.122)(中略)医者と津田との関係は、作者と津田の関係である。漱石は津田の事実を知りつくしてゐる。津田が苦笑しても失望しても知りつくしてゐる。作者にとつてこの主人公は、いはば自家薬籠中のものである。主人公が作者を裏切つて勝手に行動することは万々ない。主人公が作者をひきずることは、『明暗』においてはないのである。(P.124)(中略)医者は津田を診察^みてしまつてゐるのである。津田の病氣は悪質な結核性ではない、根本的な手術さへすれば治療可能である。穴の奥のかくれたところを、少々痛い思ひをしても切り開きさへすればよい。それが医者^の、また作者の診断である。「たゞ診断で分るんですか」といふ津田の問ひは尤である。自分の直覚や勘が当にならなかつたり、不安であつたりする限り尤である。「えゝ、診察^みた様子で分ります」といふ答へには何の不安もない。津田に関する限り、作者の直覚は神の如しといつてよい。これは長い経験から来てゐる。経験と失敗を経ての明察である。暗を経ての明である。暗↓明である。然し現在の医者^の立場からいへば、明↓暗である。暗の中に患者の津田がある。津田は暗↓明、病氣↓治療といふ経路をとらねばならない。しかし病源が解つてゐる医者からみれば、明へ出ることに疑ひはない。かくして『明暗』一篇は津田の精神更生記であることが、その第一節において約束された。(P.128)(中略)吉川夫人の意図と津田の清子との再会、小林と津田との問答、小林と延子との問答、この三つをつなげてみると、『明暗』の最後に起つてゐることが、容易ならぬ渦を巻き起すであらうといふ予感^は当然である。清子も「事実」を言ひ、吉川夫人も「事実」を言ひ、小林もまた「事実」を言つてゐる。事実に對する解釈の色合ひは各違ふであらう。各自の解釈とそれに伴ふ目標は違ふにせよ、外側の体裁ではないもの、内側のものがいま外に出ようとしてゐることは事実である。津田の更生のためには、なほ幾多の曲折と思はぬ出来事が起るだらうといふ予測はまぬがれない。だが結局は外側と内側とが一致し、私といふ我意をもたない清子の存在がやが

て大寫しに出てくるに違ひないやうに思ふ。「明暗」は色々、つまかさねてきた伏線が、ひとつところに集中して、これから読者にとつて思ひもかけぬ展開を示すことにならうという頂点で途切れてしまつたわけである。(P.152)▽

四、作品冒頭に、「明暗」の結末をみる、右の小宮豊隆・唐木順三らに対して、たとえば、三好行雄の反対の見解がある。

三好行雄の、△「明暗」の構造▽（講座夏目漱石）第三卷・漱石の作品(下)、有斐閣、昭和五十六年（一九八一年）十一月）に、次の指摘がある。

△最初の一章から読者を魅了して止まぬ——小説の導入部に、読者にはまだ未知の終末から吹きつけてくる風のように、傑作の予感が濃くただよう長篇小説なのである。(P.75)（中略）『明暗』は現に書かれているかぎりの形で、作品と呼ぶにふさわしい実質をそなえている。にもかかわらず、導入部に吹いていたあの風の源泉を読者は確かめることができない。この矛盾は、『明暗』を論じようとする試みにとつての大きなアポリアであると同時に、収束が書かれていないから、それを予想する自由をひとに残す。まして、漱石は伏線を張るという、推理小説にもつとも有効な手法を多用した作家である。書かれなかつた破局を推理する材料にも欠かないのである。たとえば唐木順三は冒頭の三節に「明暗」のモチーフは鮮明だとする。津田の痔瘻が結核性ではないから、根本的な手術をほどこせば治癒するという医師のことばを重要な伏線と見て、「明暗」の最後に起つてくること、容易ならぬ渦を巻き起「こし」、「人間の外側と内側とが一致し、私といふ我意をもたない清子の存在が大寫しに出てくる」という予測をたてる。「明暗」を「津田の精神更生記」として読むわけだが、この立場は基本的には小宮豊隆のそれと一致している。かりに吉川夫人が真相をお延に打明けたとしたら、お延はどう反応するか。お延はかねて「生きて、人に笑はれる位なら、一層死んでしまつた方が好い」と公言し（八十七）、夫のために「何時か一度此お肚の中に有つてる勇氣を、外へ出さなくつ

ちやならない日が来るに違いない」ことを予感している（百五十四）。小宮はこれをひとつの伏線と見て、お延の死を暗示しながら、「津田が靦面に切実に『事実其物に戒飭される』」、「夫もしくは自然が、人間の手を借りて津田に加へた『根本的の手術』は、慥かに成効する」と断言する。両氏の論は「明暗」が則天去私の具現をめざした作品であるとの共通の認識のうえに立っている。（P.277）（中略）唐木順三の説くように、冒頭の津田と医師との対話が、以後の展開にきわめて象徴的な意味をもつことは認めていい。しかし、医師を漱石に擬して、「根本的な手術を一思ひに遣るより外に仕方がありません」、そうすれば「結核性ぢやありません」からかならず癒りますという診断に、津田を「自家葉籠中」のものとした漱石の確信までを読むことが果して可能か。かりにそうだととしても、第三節にはつぎのような一節もある。

「厭ね、切るなんて、怖くつて。今迄の様にそつとして置いたつて宜かないの」

「矢張医者の方から云ふと此儘ぢや危険なんだらうね」

「だけど厭だわ、貴方、もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰好の好い眉を心持寄せて夫を見た。

お延は結核性ではないという診断の当否までをうたがっているわけではない。しかし、医者が手術に失敗しないという保証はどこにもないのである。現に「行き留りだとはかり」思ったところに、まだ奥があつたという判断の誤りかれば津田に告げている（一一）。眉をひそめたお延の表情はいぜんとして残るのである。

【明暗】では緻密に張られた伏線さえもが相対化される。「自分の批判は殆んど当初から働らかないし、他の批判は耳へ入らず、また耳へ入れやうとするものもない」（百三十七）吉川夫人が、そのゆえに肥大した自信をふりかざして試みようとする「お延の教育」（百四十二）の成功と、お延がいつか夫のために使うはずの「お肚の中に有つてる勇氣」（百五十四）の効果のいずれを作者が選ぶかはまだ読みとれない。「小林に啓発されるよりも、事実其物に戒飭される

方が、遙かに**観面**で切実で可いだらう」(百六十七)という小林の予言を信じる自由と同時に、「今に君が其所へ追ひ詰められて、何うする事も出来なくなつた時に、僕の言葉を思ひ出すんだ。思ひ出すけれども、ちつとも言葉通りに実行は出来ないんだ」(百五十八)という小林の別な予言をとる自由も読者に残されるのである。最後まで意識の人として、実行家へ転じえない津田の限界が指摘されるわけで、これはまた津田が決して変ることはない、つまり、かれの更生は所詮不可能との判断に読者をみちびくのである。『門』で、宗助とお米のあの仲の良い夫婦にさえ「結核性の怖ろしいもの」が胸のなかに巣くつている、と漱石は書いていた。確かに、『明暗』の作者には我執を「結核性の怖ろしいもの」と同一視する認識は無さそうである。だとしても、伏線の問題としてなら医師の誤診はありうる。すくなくとも、みずからの診断を疑うことをしない医師は、漱石と等身大ではない。(P.290)▽

⑧【八百五十倍の鏡の底に映ったもの】

人間の心理を八百五十倍にまで拡大させてみせる、『明暗』のすぐれて心理小説であることが、**比喩・約束**される。(一)、猪野謙二の、△『明暗』における**漱石**——**虚無**よりの**創造**——▽(『明治の作家』所収、岩波書店、昭和四十一年(一九六六年)十一月)に、次の指摘がある。

△極度にとぎ澄まされた精巧なレンズのような彼の眼が、人間心理の細かな幾々を執拗にあとづけ、人間と人間が互いに加えあう刺戟とそれにもとづく反応とをつきとめてゆく。その言葉と言葉とが噛みあうことによつていわば自動的に発展する人間関係の不可思議さがある。(P.153)▽

(二)、篠田浩一郎の、△『破戒』と『明暗』▽(『小説はいかに書かれたか——『破戒』から『死霊』まで——』、岩波新書

(黄版) 193、昭和五十七年(一九八二年)五月)に、次の指摘がある。

△『明暗』という漱石のさいごの小説で企てられているのは、作中人物たちの内部に世界を限定して彼らの心理を追うことに徹底することであつた。その意味で冒頭に顕微鏡からのぞきこんだおりの細菌が示されるのは象徴的であり、この小説の総体が人間心理の微細な動きを八百五十倍に拡大していままでの心理小説の境を越えようという野心がそこにあると考えることができる。(P.34)▽